

Abstract

21 世紀の同盟関係—日本の視座から

細谷 雄一（慶應義塾大学教授）

冷戦が終結した際に、ソ連の脅威が消失したことによって、もはや同盟が不要であるというような議論がしばしば見られた。ところが、冷戦後の過去四半世紀ほどの歴史を振り返ると、それが単にソ連の脅威に対抗するための勢力均衡という性質のみを備えていたわけではないことがわかる。

ここでは、過去一世紀ほどの歴史を振り返りながら、同盟が時代とともにその性質を大きく変容してきた経緯を概観する。また、国連憲章では「同盟」という用語は使われずに、憲章では「国際連合の目的及び原則と一致すること」が同盟の前提となっていた。その意味で、後の国際社会は国連で規定されるような規範を基礎としながら、同時に地域的な安定のための重要な土台を提供するようになった。ここでは、冷戦時代から現在まで続くアメリカを中心とした同盟、すなわち日米同盟、米豪同盟、米韓同盟、そして NATO を視野に入れて、21 世紀の同盟の将来像を考える。

『国際安全保障』第 44 巻第 1 号（2016 年 6 月）1—9 ページ。